

研究ノート

根拠づけ (Grounding) に関する統合説

秋葉剛史

1 主題と目的

近年形而上学者たちの間で「形而上学的根拠づけ metaphysical grounding」という概念が注目を集めている。この概念は、例えば次のような主張において典型的に用いられる：単元集合 {太郎} の存在は、太郎の存在によって根拠づけられる；「雪は白い」が真であるのは、雪が白いことによってだ；その行為の善さは、それが幸福を最大化するという事実のうちに存する；太郎がもつ痛みは彼の特定の脳状態によって構成されている、等々。これらの例からもわかるように、形而上学的根拠づけ（以下単に「根拠づけ」）とは大まかに言って、非因果的・構成的な意味での「依存」ないし「決定」の関係を表す概念だ¹。多くの論者によると、この概念は——「ことによって in virtue of」という上の言い方も示唆するように——「形而上学的 (哲学的) 説明」の概念とも本質的な結びつきをもち、形而上学はもちろんのこと、心の哲学や言語哲学、倫理学といった哲学の諸領域の探究主題そのものを形作っている。

とはいえ、この根拠づけ概念の内実理解に関しては、論者たちの間にいまだ確固とした合意はないというのが現状だ。これまで比較的多くの論者が支持してきたのは「公理的」なアプローチ——根拠づけを原始概念とした上で他の概念との関連づけを通じてその内容を解明するもの——であったが²、特にここ数年これとは若干違ったタイプのアプローチが見られるようになってきた。それは、元々は因果性の理解のために開発された枠組みを根拠づけ概念の解明に応用するというものである。以下でみるように、この方針はたしかに自然な動機をもつものであり、すでにこれをかなり具体的な仕方で開催した先行研究も存在する (Schaffer 2016; Wilson manuscript)。

だがこの方針の下で展開可能でありながら、(私の知る限り) いまだ論じられたことのない一つのアプローチがある。それはひとこと言えば、因果性

に関する「統合説」(Friedman 1974; Kitcher 1989)を根拠づけ概念の解明に用いるものだ³。私見では、これは上記方針の具体化の中でも特に自然な(もしかすると自明にさえみえる)ものであり、少なくとも一提案として検討されるに値する。それゆえ本来なら、ある程度の批判的検討が可能なくらいまで展開したうえでこの発想を提示したかったのだが、諸々の事情によりそれにはまだしばらくかかりそうなので、まずはその基本的考えと動機だけでも明らかにしておきたいと思った。そのようなわけで本ノートは、もっぱらアイディアの素描と伝達を目標とし、可能な反論や複雑化に関する議論は他の機会に譲ることにする。以下では、根拠づけと因果性の類比をごく簡単に確認し(2節)、因果性に関する統合説を導入した後で(3節)、それを根拠づけに応用する立場について論じる(4節)。

2 根拠づけと因果

本稿では根拠づけを、事実の間の関係として扱い、「事実Aは事実Bを(部分的に)根拠づける」という形の言明により表されるものとする⁴。冒頭の例で言えば、太郎が存在するという事実は{太郎}が存在するという事実を根拠づけ、ある行為が幸福を最大化するという事実はそれが善いという事実を根拠づける、等々の具合だ。

多くの論者によれば、根拠づけ関係はいくつかの重要な点で、因果関係ないし因果的依存関係(以下区別せず「因果関係」とも表す)に似ている⁵。以下では因果関係を(根拠づけとパラレルに)、「事実Aは事実Bの原因(の一部)である」という形で表される事実間関係としよう。そうすると根拠づけ関係と因果関係は、i) 非反射性や推移性といった形式的特徴を共有する点、ii) 規定determination関係の一種である点、iii) 説明と内的な連関をもつ点、iv) 懐疑論や多重決定などをめぐり同様の懸念が生じる点、等々に関して似ている。

これらの注目すべき類似性——そのために根拠づけはときに「形而上学的因果」(Schaffer 2016; Wilson manuscript)とも呼ばれる——をふまえれば、根拠づけの解明のために因果性へのアプローチを応用する道は自然にみえてくるだろう。その中でも以下で検討したいのは、因果性に関してキッチャーらが提案した「統合説the unification view」を応用する道である。

3 因果に関する統合説

統合説は元々、因果性というより科学的説明についての理論だが、ここではKitcher 1989に従い、これを因果性についての理論として解釈する(この

解釈は本節の末尾において示される)。なお以下では、同論文 (Kitcher 1989) への参照指示は頁番号のみで表す。

まずは科学的説明の理論としての統合説をみていこう。統合説は、科学的説明に関する「DNモデル」(ヘンペルらのものとして知られる見解)が抱える困難を克服するため提示された。DNモデルによると、科学的説明とはある種の演繹的論証、すなわち、何らかの真なる全稱文を含む前提の集合から被説明項を導くような論証に他ならない(411)。だがこの基準には早くから、特にその十分性に関して深刻な問題が指摘されてきた。例えば、ある塔の影の長さ(と他の前提)からその塔の高さを導く論証と、塔の高さ(と他の前提)から塔の影の長さを導く論証が、この基準によると両方正しい説明であることになるが、実際に正しいのは後者だけだ(=非対称性問題、412)。また、ある塩の塊が水に溶けたという結論を、誰かがその塊に「呪い」をかけたこと(と他の前提)から導くような論証も、この基準によると正しい説明になってしまう(=無関連性問題、ibid)。

こうした問題に対処するため統合説は、正しい説明は単にDNモデルの条件を満たすだけでなく、真理のベストな体系化に属するような論証でなくてはならないと主張する(430f)。ここで「真理の体系化」とは、世界に関して真であるような各々の文を結論としてもつ演繹的論証からなる集合のことであり⁶、その中でもベストな体系とは最高度の「統合性」をもつもの、つまり、なるべく少数の基礎的前提と推論パターンからなるべく多くの結論を導くような体系のことだ。いまそうしたベストな体系をSと呼ぶとすれば、一般に、前提 A_1, A_2, \dots からBを導く論証が正しい説明であるかどうかは、それがSに属するか否かによって決まる。つまり統合説によると、正しい科学的説明とは、世界の真理の最も統合的な体系化の一部をなすような論証のことなのである⁷。

この見解に従うと、上でみた「非対称性問題」には次のように答えられる(485)。一方で、塔の高さから影の長さを導く論証は、ある非常に汎用性が高くまた様々な結論を導くのに不可欠な推論パターン(「起源からの発展」と呼びうる)の一例であるから、問題なくSに含まれると考えられる。しかし他方でこれと逆向きの論証、つまり影の長さから塔の高さを導く論証のパターンは、影のない状況では適用できないし物体の高さを導くために不可欠でもないといった事情から、Sには含まれないだろう。こうして二つの論証の説明としての地位の差は、ベストな体系に属する資格という点から再構成できる。また「無関連性問題」に対しても、問題となる論証のパターンに注目して同様に答えられる(483)。

こうした統合説の発想は、明らかに全体論的なものだ。統合説によれば、ある論証が正しい説明であるかどうかは、それを一員として含んだ場合に体系全体がどうなるか——その統合性が増すかどうか——によって決まる。正しい説明は個々単独にではなく、あくまで自然の秩序の体系的描像の一部をなす限りで、正しい説明という身分を獲得するのだ(430. またFriedman 1974: 18も参照)。

そして本節の最初に示唆したように、こうした科学的説明の理論としての統合説は、キッチャーによると、同時に因果性の本性を明らかにするものにもなっている。というのも彼によれば、世界の因果的な秩序(とされるもの)は、実は我々が手にしうる最善の体系における説明的秩序から独立したものではないからだ(497f)。むしろそれは、真理の体系化を極限まで進めていった先の理想的体系における導出上の依存関係のいわば「投影」(496)に他ならない。つまりキッチャーの考える統合説によると、「因果的依存性は説明的依存性のうちに根拠をもつ」(436)のであり、前者の概念は後者の概念から「派生したもの」(ibid.)なのである。

4 根拠づけに関する統合説

さて、以上のような考えを根拠づけに適用して得られるのが、根拠づけに関する統合説だ。この説によれば、事実の間の根拠づけ(形而上学的依存)関係は、理想的に最善な体系における説明的依存関係の一種に他ならない。統合説は因果的依存と形而上学的依存を、本質的に同じ「説明的」源泉をもったものとみなすのである⁸。(もちろんこの場合、二つの依存関係を区別することは重要な課題になる⁹。)

根拠づけの統合説がどう機能するかを示す単純な例として、先にみた「非対称性問題」の根拠づけ版を考えてみよう。一般に、AがBを根拠づけるのは、AがBを形而上学的に必然化する場合に限るという見解はもっともらしい。(これは、正しい因果言明は何らかの(少なくとも偶然的に)真な全称文を背景にもたねばならないという見解とパラレルだ。)だが明らかに、形而上学的必然化の成立は、根拠づけの成立にとって十分ではない。例えば、「太郎が存在する」から「{太郎}が存在する」への推論と、逆向きの推論を比べてみると、根拠づけ関係の主張として正しいのは前者だけだ。必然化の成立という点では差がないのに、なぜこうした非対称性が生じるのだろうか。(紙幅の都合で割愛するが、「無関連性問題」の根拠づけ版も同様に作れる。)

根拠づけの統合説はこの問いに対し、因果性の場合と同じく、理想的に最

善な体系への帰属資格という観点から答えることができる。いま問題となっている二つの推論のうち、前者が例化する推論パターン（与えられた対象からそれを含む集合の存在を導くもの）は、適用範囲の広さや不可欠性の点からいずれにしても最善の体系に含まれると考えられるが、後者が例化する推論パターンについてはおそらく同じことは言えない（要素の存在はたいてい集合の存在とは別のより一般的な前提から導ける、等の理由から）。つまり必然化関係に立つ言明組の間にも、最善の体系の一員としての適格性に関しては違いがありえ、根拠づけ関係の成否の差はまさにその違いを反映したものととして理解できる。（無関連性問題の根拠づけ版にも同様にして答えられる。）

こうした統合説の見解は、根拠づけに関する主張のうちに我々が実際に込めている内容を、かなり適切に捉えているように思われる（統合説が自明に見えるとしたらそれはおそらくこのためだ）。この点は、根拠づけ主張の中でも、（上の例とは違って）その正否に関して実質的な争いがあるようなものに注目すると納得しやすい。しばしば言われるように、観念論 vs. 実在論、三次元主義 vs. 四次元主義、唯名論 vs. 普遍者説といった形而上学的論争は、それぞれ特定の根拠づけ主張の正否を争うものとして理解されうる（Correia 2005; Fine 2012; Raven 2011）。そして注目すべきは、多くの場合この種の論争で実際の係争点となるのは、当該の主張を真として採用した場合の体系全体のよさ（統合性の高さ）に他ならないという点だ。つまりある根拠づけ主張を行う際、我々は実質的に、それに対応した導出を含む体系こそが最善だ（その公算が高い）と主張している、と言ってよいように見える。言い換えると統合説は、根拠づけイディオムが我々の探究実践の中でもつ使用価値をうまく捉えていると思われるのだ。

さらに根拠づけの統合説は、次のような二つの種類の懐疑論（cf. Audi 2012; Bliss & Trogon 2014: § 8）にも一定の回答を与える。すなわち、i) 根拠づけ概念はそもそも理解不能だとか、この概念を用いた主張は無制約ないし恣意的なものにすぎないと論じるタイプの懐疑論と、ii) 「根拠づけ」は雑多な寄せ集めに付けられた名前にすぎず、そこに探究に値するような統一性はないと論じるタイプの懐疑論だ。統合説はまず i) に対して、根拠づけ主張を非形而上学者にも理解可能な制約下にあるものとして解釈することで応じ、また ii) に対しては、一見雑多な諸例（本稿の冒頭で挙げたような）のうち、ある共通の要素を見出すことによって応じる。

もちろん課題は山積みではあるけれど、以上のように根拠づけに関する統合説には、今後より詳しく展開・検討される価値があると思う¹⁰。

注

1. 他の具体例や根拠づけをめぐる様々な問題については、註2で挙げる文献に加え、Bliss & Trogdon 2014やCorreia & Schnieder 2012の編者イントロを参照。
2. この種のアプローチに関してはAudi 2012; Raven 2011; Rosen 2010を参照。
3. 統合説を説明というより因果性の理論と解する点については以下の3節を参照。
4. 根拠づけ言明の論理形式に関する議論は前註1で言及した二文献を参照。
5. 以下の類似点については、Audi 2012; Schaffer 2016; Wilson manuscriptを参照。
6. ただしここで問題となる真理の範囲には限定が必要である(Kitcher 1989: 494-5)。
7. 明らかに、この考えは自然法則の「最善体系説」(D. Lewis)と密接に関わる。
8. Kitcher 1989: § 3.2はさらに、統合説を数学的説明などにも適用している。また注意しておく、本稿では議論の便宜上、因果の統合説を経由して根拠づけの統合説を導入したが、論理的には後者をとるために前者をとる必要はない。
9. 二つを区別する観点としてはさしあたり、論証の前提の一部となる全称文の様相的な強さ、各事実を記述する語彙の一般性、などが考えられる。
10. 本稿は平成27-8年度文科省科研費に基づく研究(課題番号15H06088)の成果の一部である。

参考文献

- Audi, P. 2012. Grounding: Toward a Theory of the In-Virtue-of Relation, *Journal of Philosophy* 109: 685-711.
- Bliss, R., Trogdon, K. 2014. Metaphysical Grounding, E.N. Zalta (ed.), *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. (<http://plato.stanford.edu/entries/grounding/>)
- Correia, F. 2005. *Existential Dependence and Cognate Notions*, Philosophia.
- Correia, F., Schnieder, B. (eds.) 2012. *Metaphysical Grounding*, Cambridge UP.
- Fine, K. 2012. Guide to Ground, in Correia & Schnieder 2012: 37-80.
- Friedman, M. 1974. Explanation and Scientific Understanding, *Journal of Philosophy* 71: 5-19.
- Kitcher, P. 1989. Explanatory Unification and the Causal Structure of the World, in P. Kitcher & W. Salmon (eds.), *Scientific Explanation*, University of Minnesota Press: 410-505.
- Raven, M. 2011. In Defense of Ground, *Australasian Journal of Philosophy* 90: 687-701.
- Rosen, G. 2010. Metaphysical Dependence: Grounding and Reduction, in B. Hale et al. (eds.) *Modality: Metaphysics, Logic, and Epistemology*, Oxford UP: 109-36.
- Schaffer, J. 2016. Grounding in the Image of Causation, *Philosophical Studies* 173: 49-100.
- Wilson, A. manuscript. Metaphysical Causation, Online Manuscript. (<http://alastairwilson.org/files/mc120715.pdf>)

(千葉大学)